



現代の若者向けの幕末の志士たちの雑誌、月刊「松下村塾」

# 自由闊達な討論形式の教授法を現代に

## ——松下村塾をモデルにしたベンチャー大學

今元英之 ザメディアジョン・エデュケーショナル代表取締役

松下村塾発祥の地山口県で、月刊「松下村塾」なる雑誌が刊行されていた。創刊の狙いや松下村塾の教えを現代に蘇らせようとするベンチャー大學の取組みを聞いた。

——月刊「松下村塾」とはどのような雑誌なのでしょう。

明治維新の原点とも称される「松下村塾」は、幕末の思想家・教育者「吉田松陰」が山口県萩市に開いた私塾です。わずか8畳一間の世界から、高杉晋作、伊藤博文、木戸孝允、山県有朋など明治の改革を指導した多くの志士が輩出されました。至誠を貫いた師、吉田松陰が実践した教育や考えとはどのようなものだったのか、そして、激動の時代を駆け抜けていった志士たちは何を学び何を思ったのか、その一挙手一投足にスポットを当てた若者の向けの本です。先行きの見えない不確かな現代は、ある意味幕末に似ているといわれます。今の20〜30代の若者たちに、誌面を通じて松下村塾に入塾した気持ちになってもらい、新しい価値観を見いだす道標のような存在となることを目指しました。

——「月刊松下村塾」を発行したきっかけは？

ザメディアジョンは山口県でタウン情報誌などを作っている地域密着型の出版社ですが、ある時、山

口県を全国にPRできる本を出版しようという企画が持ち上がりました。知名度が高い郷土の誇りは何だろうと模索を続けたところ、吉田松陰が浮上。ちょうどNHK大河ドラマ新選組が放映中で、若者が幕末に目を向け始めた頃です。30才で一生を終えた松陰の考えや行動を等身大で描くことが、若者に向けたメッセージになり、心に響くに違いないと確信したのが発刊のきっかけです。また、時の総理大臣

——発刊後の反響は？

小泉純一郎が、尊敬する人物として吉田松陰の名を挙げており、日本でちよつとしたブームが起こっていたことも動機の一つでした。

月刊松下村塾は2004年に発刊されましたが、いまだに全国から注文が来ます。「この本を傍らに置いて目標に向かってチャレンジし続けよう」といった前向きな内容の手紙が読者から多く寄せられることも特徴でしょう。松陰は、「身は滅んでも魂を残す」という辞世の句を遺しましたが、没後152年経ってもなお人々の背中を押し続けているんだということを実感しています。

——政治家や研究者、企業経営者など、吉田松陰や松下村塾に関心を寄せるファンは多いですが、何が人々をひきつけるのでしょうか。

論ずだけではなく自ら行動にうつす思想家、それが吉田松陰でした。とはいえ松陰のチャレンジは、ことごとく失敗に終わっています。海外密航を企て

るも失敗、脱藩となり失敗、そして獄中生活を余儀なくされるといった具合に、生きている間は苦難の連続でした。しかし、そんな最悪の状況の中においても松陰が成し遂げたことがありました。それは、種を一粒ずつ蒔いていったこと。牢獄では、囚人達の能力に気づき個性を伸ばす獄中講義を始めました。松下村塾の原点ともなった貴重な経験です。高い場所から理想を語るだけで実際には何もしない要人が少なくない現代において、こういう松陰のエピソードひとつが、胸を打つのかも知れません。

また、松陰の墓に刻まれている「二十一回猛士」という別号の由来も、多くの人に夢や感動を与えているのではないのでしょうか。21回まで猛を振るうことができるのと神のお告げがあった松陰は、自分の信じるところを貫くことで意気を表しました。しかし、3回勇猛を遂げたところで処刑。本人にしてみればまだ道半ばだったんですね。そんな松陰の痛恨の思いと、30才という若さにして、維新の先駆者としてさまざまところで種を蒔き影響を与えたという事実が、感銘や共感を呼んでいるようです。

りも今の自分の地位とか名譽を最優先にしがちなのではないかと思います。生きていく間に何を成し遂げたかによって死後の自分が生きてくるといふことを考える教育も必要なのではないでしょうか。最後まで至誠を貫いた松陰の死からは、そんなメッセージが読みとれます。

また、現地に行つて物事を考えるという現場目線が、今の教育には欠けているのではないかと思います。松陰は、九州、江戸、東北と遊学することに自分を高めていきました。海外事情などの書物をたくさん読んで知識を吸収すると同時に、藩を越えた人との出会いや交流を通して新しい教育観が培われていき、松下村塾で教授されました。

——吉田松陰が今の日本にやってきたら、どんな改革が必要と説くでしょうか？

第3の開国ともいわれるTPP問題に関しては、賛成の立場をとるでしょう。「開国をせよ。それが自国を強くする」と助言するのではないのでしょうか。環境問題については、この先原発をどうするかとい

——松陰の志を継いだ松下村塾の教育の特長とは？

松陰が一方的に教えるのではなく、国事に対して意見を出し合うディスカッション形式だったことが最大の特長で、自由闊達な雰囲気の中、ひとり一人の個性を重んじ、いい部分を引き出しながら伸ばす教育が施されました。また、松陰は「飛耳長目（ひじちようもく）」に重きをおきました。「耳を飛ばし目を長くして、広い世界から情報を取り入れれば、情報と学問を組み合わせて初めて役に立つ考え方ができる」と情報の大切さを塾生に教示しました。さらに、身分の隔てなく、志のある者たちで新しい時代を築くために立ち上がるという「草莽崛起」の考えは、高杉晋作を始めとする塾生に受け継がれていきました。こうして松陰が蒔いた種は実っていったのです。

——現代の学校教育や企業の人材教育において松下村塾から学ぶべきことは？

幕末の人たちは自分の死後についてもつと深く考えていたのではないのでしょうか。現代人は、死後どう議論が尽きないところですが、「次世代にツケを回すことだけはするな」と説くと思います。「もつと節約して、節電に取り組め」と要請もするでしょう。また、今の日本が多々抱える財政問題については、当時の幕府も同じ状況だったはずで、諸外国との貿易開始により幕府を強くすると、公武合体の推進と開国を容認するといった国政全般の改革運動が激しくぶつかり合いました。いまでいう民主党VS野党のように。だから、松陰が生涯を貫いた「至誠にして動かざる者は未だ之有らざるなり」という姿勢は今の時代にも通じるのではないのでしょうか。「日本はこれからどうあるべきなのか、誠を尽くせばわかってくれない人はいない」と。



いまもと・ひでゆき  
ゲームメディアジン・エデュケーション・代表取締役  
「吉田松陰の本を作成するだけではなく、その志を現場で伝えたい」と思い、日本ベンチャー大学を創設しました。起る薬を志す学生や進路が決まらない学生が対象で、入学金も授業料もすべて無料です」